

会長挨拶

2010、11年度の日本結晶学会会長を仰せつかりました甲斐 泰と申します。どうかよろしく願いいたします。

2年前の2008年8月、日本で2度目、京都に次いで36年ぶりに大阪で第21回国際結晶学連合会議が開かれました。第21回会議は国際結晶学連合（IUCr）が設立されてちょうど60年目に当たる記念すべき会議でもあり、当時のIUCr会長が大橋裕二先生でもありましたので、日本の結晶学関連研究者の総力を挙げた会議となりました。その結果、出席者総数2,617名、海外からの参加者1,648名と、会議の規模の点でも国際性の上でもIUCr会議の中で際立ったものとなりました。

2010年は、日本結晶学会創立60周年の年に当たります。日本結晶学会が1989年（平成元年）に編纂した「日本の結晶学」によりますと、結晶学研究連絡委員会の第1回会議（1949年）において日本結晶学会創立が決議され、創立準備委員会が構成されて会員候補者の推薦を行い、計102名の創立会員を選んで1950年5月13日に東京で創立総会を開き、満場一致で西川正治先生を会長に選出した、とあります。1951年に開かれた第2回IUCr総会において、日本のIUCrへの加入が承認されています。このような経緯をたどってみますと、日本の結晶学が早くからその力を蓄え、国際感覚に優れた先達によって導かれていたことに気づきます。

現在の日本結晶学会は会員数約1,200名で、設立当時の10倍に成長しています。写真法による構造解析を経験し、四軸自動回折計の立ち上げ時期に大学院を過ごし、京都でのIUCr会議で口頭発表の榮に浴し心弾ませた世代の私にとりましては、今の日本の結晶学の進歩は夢のように思えます。それと同時に、結晶学分野に身を置くことのできた幸せも感じています。科学技術の基礎を支える学問分野として、その使命を一貫して果たし続けてきた結晶学、その分野で活躍してこられた日本結晶学会会員の皆様の純粋で真摯な姿勢にも敬服してまいりました。

創立60周年を迎え、日本の結晶学がますます発展し、純粋な学問発展のためにまた有用な技術として社会に貢献していくために、これまで以上に会員の力を結集して行きたいと考えています。そのためには、若い力の参加が欠かすことはできません。どのようにすれば若い研究者が結晶学に打ち込んでいくことができるか、それを考えるのも日本結晶学会の使命かと存じます。

日本結晶学会会員の皆様のお知恵を集約し、結晶学の発展のために微力を尽くしてまいりたいと考えております。ご協力賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

甲斐 泰